

NOBEOKA CASTLE SITE

延岡城内遺跡 C 地点

YOSINO SITE

吉野遺跡 B 地点

YOSINO SITE

吉野遺跡 C 地点

YOKOTANI SITE

横谷遺跡

KUROTUTIDA SITE

黒土田遺跡

NOBEOKA CASTLE SITE

延岡城内遺跡 B・D 地点

平成4年度市内遺跡発掘調査事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

延岡市教育委員会

序 文

延岡市は宮崎県の北部に位置し、県内でも最大を誇る工業都市であります。

近年は、東九州自動車道延岡線整備計画を睨んで、民間開発、公共事業等の大規模開発事業が計画されつつあります。そのため、これらの開発事業に伴って貴重な埋蔵文化財が失われようとしています。

そこで、市教育委員会では開発事業等の計画に際して、埋蔵文化財の確認調査等を実施し、開発事業との調整資料を作成しているところであり、本書はその報告書であります。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助になることを願うとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり県文化課をはじめ多くの方々のご協力を得ました。記して感謝いたします。

平成5年3月31日

延岡市教育委員会

教育長 松坂 数男

例 言

1. 本書は、延岡市教育委員会が国庫補助を受けて、平成4年度に実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本年度は、延岡城内遺跡C地点、吉野遺跡B地点、吉野遺跡C地点、横谷遺跡、黒土田遺跡、延岡城内遺跡B・D地点、天下2号古墳の発掘調査及び測量調査を実施した。
3. 本書に使用した遺物の実測、トレース、図面の作製については、山田聡、甲斐佳代、敷石サヨ子、高橋京子、山本敬子があつた。
4. 現場での写真撮影は山田があつた、遺物の写真撮影については、後藤司郎氏にお願ひした。
5. 本書の執筆及び編集は山田があつた。
6. 方位は、磁北を向いている。
7. 出土した遺物は内藤記念館で保管しており、今後展示公開の予定である。

本文目次

第1章	はじめに	1
1.	はじめに	1
2.	調査の組織	2
第2章	調査の記録	3
1.	延岡城内遺跡C地点	3
(1)	位置と環境	
(2)	調査に至る経緯	
(3)	調査の概要	
2.	吉野遺跡B地点	10
(1)	位置と環境	
(2)	調査に至る経緯	
(3)	調査の概要	
3.	吉野遺跡C地点	14
(1)	位置と環境	
(2)	調査に至る経緯	
(3)	調査の概要	
4.	横谷遺跡	16
(1)	位置と環境	
(2)	調査に至る経緯	
(3)	調査の概要	
5.	黒土田遺跡	20
(1)	位置と環境	
(2)	調査に至る経緯	
(3)	調査の概要	
6.	延岡城内遺跡B・D地点	24
(1)	位置と環境	
(2)	調査に至る経緯	
(3)	調査の概要	

挿図目次

第1図	遺跡分布図	2
第2図	延岡城内遺跡C地点位置図	3
第3図	延岡城内遺跡C地点調査区配置図	5
第4図	出土遺物実測図	6
第5図	土層断面図(第1トレンチ、第2トレンチ)	7, 8
第6図	吉野遺跡B・C地点位置図	10
第7図	吉野遺跡B地点周辺地形図	11
第8図	石棺実測図	12
第9図	吉野遺跡C地点周辺地形図	14
第10図	土層断面図	15
第11図	横谷遺跡位置図	16
第12図	横谷遺跡調査区配置図	17
第13図	土層断面図	18
第14図	黒土田遺跡位置図	20
第15図	黒土田遺跡調査区配置図	21
第16図	土層断面図	22
第17図	延岡城内遺跡B・D地点位置図	24
第18図	延岡城内遺跡B地点調査区配置図	25
第19図	延岡城内遺跡D地点調査区配置図	25
第20図	土層断面図	26

表目次

第1表	平成4年度市内遺跡発掘調査一覧表	1
-----	------------------	---

図版目次

図版1～4	延岡城内遺跡C地点
図版5, 6	吉野遺跡B地点
図版7	吉野遺跡C地点
図版8, 9	横谷遺跡
図版10, 11	黒土田遺跡
図版12	延岡城内遺跡B・D地点

第I章 はじめに

1. はじめに

延岡市は、宮崎県の北部に位置し、五ヶ瀬川の豊富な水力発電を基に発展する県下最大の工業都市である。しかし、近年は若者の流出が続いて人口がやや減少し、街の活気が低迷しているといわれている。

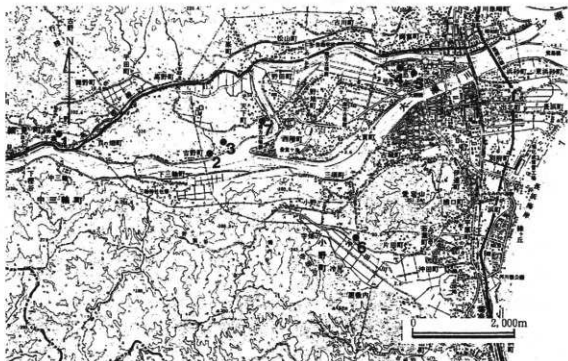
このため、延岡市では、都市基盤整備を充実させるために道路や公園整備等が進められている。また、農業経営等にも近代化の波が押し寄せ、中型機械導入による経営の効率化を目指した生産基盤の整備が進められている。さらに、地域拠点都市指定に向けた開発構想が浮上りつつあり、それに関連して東九州縦貫自動車道西都～延岡間の整備計画路線への格上げ計画及び延岡外環状線の計画など大規模開発が進められようとしている。

これらの諸開発事業によって、埋蔵文化財への影響が懸念されることから、開発事業と埋蔵文化財の保護との調整資料を得るため発掘調査を実施した。

本年度の市内遺跡発掘調査は下記の7カ所で実施した。なお、天下2号古墳墳丘測量調査については、年度末調査であったことから割愛させていただき次年度報告とする。

第1表 平成4年度市内遺跡発掘調査一覧表

地図 番号	遺跡名	所在地(延岡市)	調査原因	調査面積	調査期間
4	延岡城内遺跡C地点	本小路39-1	コミュニティ施設建設	200㎡	平成4年5月12～23日
2	吉野遺跡B地点	吉野町1653番地	倉庫建設	20㎡	平成4年6月9～11日
3	吉野遺跡C地点	吉野町1532番地 外	畑地償還	5㎡	平成4年10月15～16日
6	横谷遺跡	小野町6838番地 地先	市道改良	200㎡	平成4年10月19～20日
1	黒土田遺跡	細見町3285番地 外	圃場整備事業	50㎡	平成4年11月4～7日
5	延岡城内遺跡B・D地点	本小路170 外	都市公園整備	50㎡	平成5年2月～3月
7	天下2号墳	天下町天下神社内	史跡保存	300㎡	平成5年3月17～18日



第1図 遺跡分布図

2. 調査の組織

調査主体 延岡市教育委員会

教育長 松坂数男

社会教育課長 渡辺良平

文化係長 沖米田俊雄

庶務担当 吉永綾子

調査員 山田 聡

調査指導 北郷泰道 (県教育庁文化課主査)

調査作業員 甲斐カツキ、工藤幸一、工藤今朝子、久保利男、酒井巖、酒井清子、酒井初枝、酒井正志、酒井義徳、林田裕子、牧野昭徳

資料整理 甲斐佳代、敷石サヨ子、高橋京子、山本敬子

発掘調査において、延岡市社会教育センター、同都市計画課、同耕地課、同土木課、同農林課の方々にご協力をいただいた。また、土地所有者の高橋勇人氏、高橋賢勇氏、高橋貞男氏には調査の課程において便宜をはかっていただいた。記して感謝します。

第Ⅱ章 調査の記録

1. 延岡城内遺跡C地点

(1) 位置と環境

延岡城内遺跡C地点は、延岡市本小路39-1に所在する。

延岡城は、1587年延岡に入封した高橋元種により1601～1603年にかけて築城したとされている。当時は県城と呼ばれ、その後の藩主有馬氏時代に延岡城と改めたとされる。城郭は、城山（標高53.4m）を中心に天主台、本丸、二ノ丸、三ノ丸が築かれ、さらに西側約300mには、歴代藩主の居館（有馬氏以降とされている）である西ノ丸がある。中でも、本丸と二ノ丸の間には高さ約22mの通称「千人殺し石垣」と呼ばれる



第2図 延岡城内遺跡C地点位置図

堅固な石垣を中心に各曲輪に石垣が築かれており、宮崎県内にみられる城郭の中でも代表的な近世城郭といえる。

今回の調査地点付近は、有馬家中延岡城下屋敷並絵図（1670～1683）、延岡藩士族屋敷図（1868年前後）によると、延岡城の内堀が予定地内の東西方向にみられ、講堂の付近には厩が描かれている。内堀は石垣がみられないことから素堀とみられるが、厩との境付近には石垣が見受けられ、現在も段差が生じていることから境に何らかの段差があったものとみられる。また、予定地東側には内堀を南北に切る格好で現在の岡富中学校前に入る道筋があり、「土御門」または「土橋御門」とされる門が見受けられ、城内に入る重要なポイントであったことが伺える。さらに、予定地のすぐ北側付近は、明和5年（1768）年に開学した学問所、武芸所（後の藩校廣業館）が見受けられる。

明治以後、予定地付近は藩校廣業館の後身として延岡亮天社（延陵社学）、旧延岡藩主内藤政学公により「女児教舎」が設立されている。以後、明治19年に開校した延岡小学校が昭和22年から同48年の移転まで開校している。その後、同53年にはプールと講堂を残して現在の社会教育センターが建設されている。

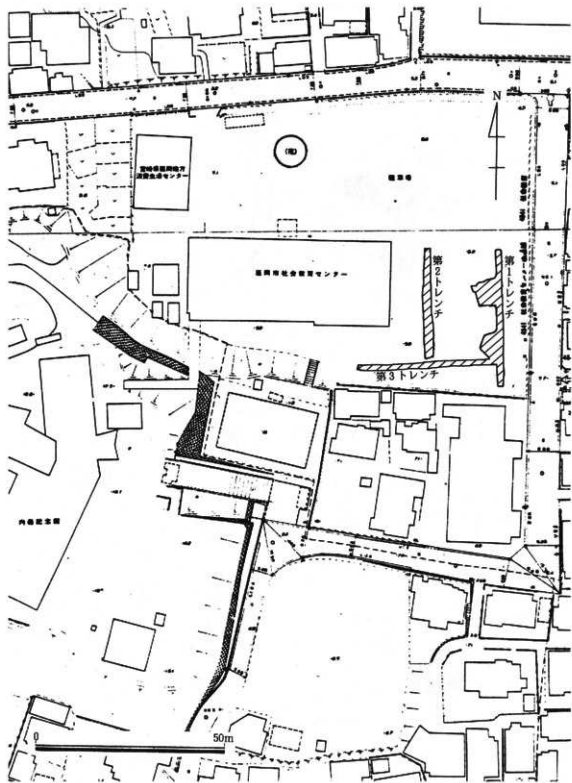
(2) 調査に至る経緯

平成2年9月、市長は議会において「内藤記念館周辺に文化ゾーンを建設する意向である」旨を表明。平成4年4月、社会教育課内に文化ゾーン建設準備室を設置して本格的な検討にあたり、社会教育センター敷地内の芝生広場、旧延岡小学校講堂、プール及び、隣接する民有地に建設する構想が固まった。

しかし、当地区は延岡城内にあたり内堀跡、厩跡の存在が予想され、文化財保護法に規程される周知の埋蔵文化財包蔵地にあたることから、予想される遺構等の状況を把握する為、事前の確認調査を実施することになった。

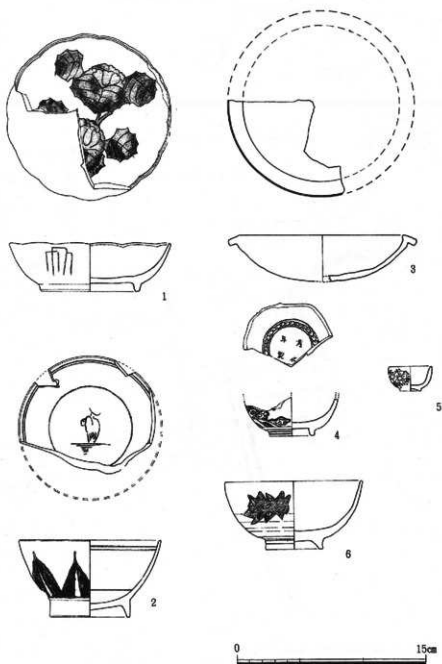
(3) 調査の概要

今回の調査は、延岡城内堀跡及び厩跡の所在確認を主目的とすることからトレンチ調査法を採用した。但し、調査時点では、予定地域の南半分は建物があることから北側の芝生広場を中心に東西方向1カ所、南北方向2カ所の合計3ヶ所にわたって入れることとした。

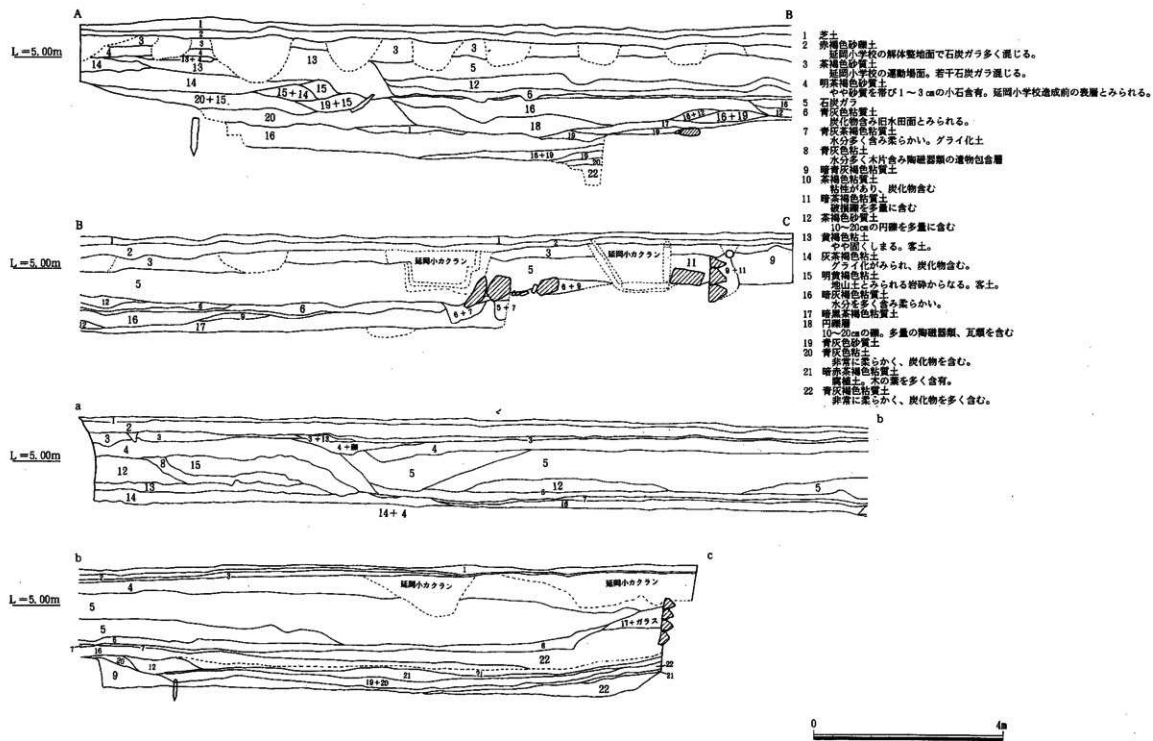


第3図 延岡城内遺跡C地点調査区配置図

第1トレンチ、第2トレンチは、内堀跡に直交するように予定地東側及び西側の南北方向に入れてみた。いずれも、地表から約0.5～0.8mまでは延岡小学校の残骸と客土が混在していた。その下層は、深さ約1.5mまで真黒な石炭ガラ（第5層）でびっしり埋められていた。これは、昭和初期から30年代にかけて旭化成が所有する2カ所



第4図 出土遺物実測図



第5図 土層断面図(上2列は第1トレンチ、下2列は第2トレンチ)

の石炭火力発電所から大量に排出されていたもので、当時は道路の基盤や低湿地帯などの客土によく利用されていたとのことである。当地においても、小学校建設に伴う基盤のかさ上げ用の客土として利用されたものであろう。幸いなことに、石炭ガラを一気に埋めたためにその下層は良好な状態で残存しており、下層が昭和24年の校舎建設以前の地形を示し、明瞭に識別することができた。土層観察によると、小学校建設以前は一段低くなって標高約4.2m付近から水田が営まれたとみられる土層が確認された。その下層は水分を多く含有する粘質土、砂質土が堆積していた。また、トレンチの南側からは内堀の存在を示すとみられる石垣が検出された。また、第2トレンチの標高約3.4m付近からは木の葉の腐植土がみられ、第1トレンチのほぼ同レベル付近からは、多量の陶磁器類や瓦類が出土した。遺物は、1・2・4の肥前系磁器に代表されるものが殆どである。3は陶器で蓋の可能性があり用途は不明である。これらは主に18世紀から明治頃とみられ、少なくとも大正以前まで内堀が存在していたことを示すものとして注目される。また、堀跡横の土層から弥生後期後半～終末期に比定される高坏、短頸壺、甕などの破片が出土し、付近にはこの時期の遺跡の所在が推定される。堀幅については、トレンチが堀に直交しないために詳細は不明であるが、土層断面によると10数mあったものと推定される。

第3トレンチは、竈跡の広がりを確認するため東西方向に入れてみた。地表下約40cmからは遺構は確認できなかったものの瓦類が多数出土したことから、これ以上の調査については次回の本調査にまわすこととした。

今回の調査では、小学校校舎など大規模な建設工事が行われていたものの、全く失われた延岡城の堀跡の一部がほぼ良好な状態で確認され、延岡城本来の姿の一端を垣間見ることができた。この結果、今後本格的な調査の必要性が明らかとなり、城内における開発行為等に際しては、事前に史料等の研究を行い、その対策についても十分な検討をする必要があることを裏付ける結果となったといえよう。

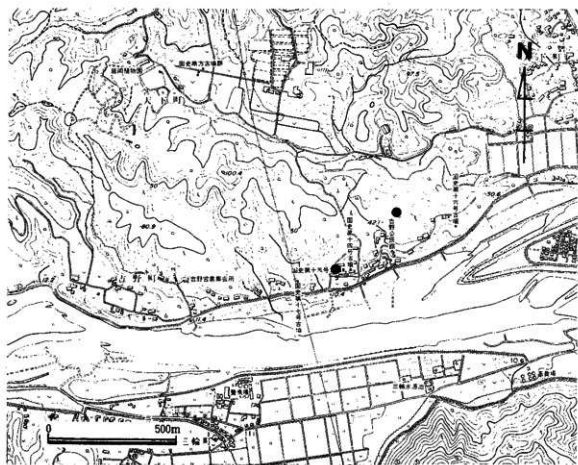
なお、本格調査については、平成5年度の秋頃に実施の予定である。

2. 吉野遺跡B地点

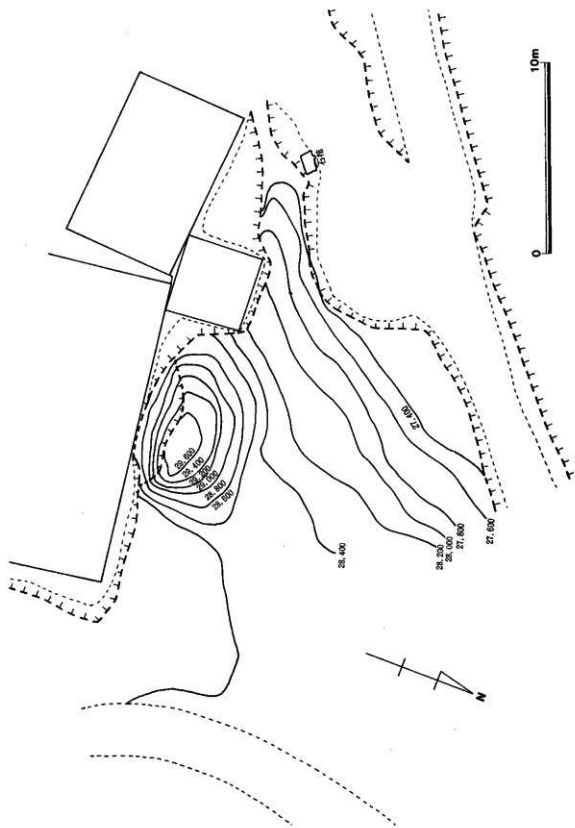
(1) 位置と環境

吉野遺跡B地点は、延岡市吉野町字吉野1653番地に所在する。本遺跡は、南方古墳群15号墳の墳丘裾から約10m西側の斜面にあって、古くから石棺の蓋石及び側壁が露出していた。

吉野町は、五ヶ瀬川と大瀬川との分流点から上流北岸の丘陵地帯に広がっている。付近には、円墳7基からなる国指定南方古墳群が分布し、周辺の畑からは土器や石鍬などが多く採集され、古くから周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていた。なかでも14号墳は、直径約24mを計り、長さ約3mに及ぶ同古墳群内最大の舟形石棺を内部主体とし、鉄剣1、直刀2、鉄鍬30などが出土している。15号墳は、14号墳に西約15



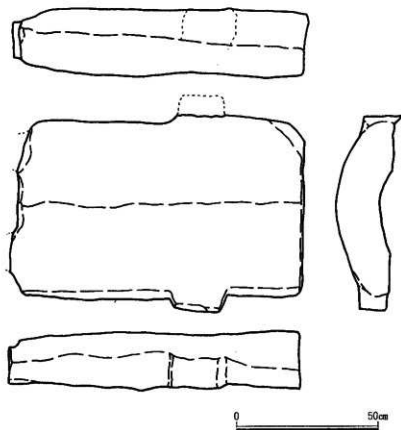
第6図 吉野遺跡B・C地点位置図



第7图 吉野遺跡B地点周辺地形図

mに位置する復元直径約10mを測る円墳で、阿蘇溶結凝灰岩製の組合せ箱式石棺を内部主体とする。出土遺物は、鉄剣1、硝子製小玉60、鉄鏃22本、人骨が検出されている。

また、最近の調査において、北東約800mの台地上に位置する今井野遺跡（平成元年度・3年度）から先土器時代のナイフ形石器、縄文早期の集石遺構、北約250mの丘陵尾根筋に位置する吉野遺跡（平成2年度調査）から先土器時代の台形石器、三稜尖頭器、ナイフ形石器、石核、剥片類、古墳時代の土壇墓、奈良～平安時代の土壇、階段状遺構が検出されており、当地域における先土器時代から平安時代にかけての様相が少しずつ解明されつつある。



第8図 石棺実測図

(2) 調査に至る経緯

平成4年4月、吉野町1653番地高橋勇人氏から、「同敷地内に以前から露出していた石棺を倉庫改築工事中に重機が誤って触れて落とした」との連絡を受けた。市教育委員会では、早速現場に赴き状況の確認を実施した。石棺は、ほぼ元の位置におかれていたが、地盤が不安定で崩落の危険性があることから、応急的に木杭による補強を行った。

その後、地権者の高橋氏と石棺の保護についての協議を行ったところ、石棺は既に原位置を保っておらず、現状のままでは崩落の危険性が拭えないとの結論に達し、これ以上の地形改変については行わない旨を条件に、隣接する国指定15号墳の保護を最優先に必要な最小限度の発掘調査を実施することになった。

(3) 調査の概要

発掘調査は、地形測量を中心に平成4年6月9日～11日まで実施した。

地形測量では、15号墳が約1/2強滅失していることが確認され、復元径約10mの小円墳であったことが判った。

石棺部分は、蓋石1枚と側壁1枚が検出された。蓋石は、長さ約100cm、幅約65cmを測り、内側は剝抜タイプになっており朱がみられる。長辺には、一方は欠損しているものそれぞれ1個ずつ縄掛突起が見受けられる。また短辺の一方は殆ど欠落しているが僅かに縄掛突起の痕跡が2カ所認められ、もう一方は別の蓋石と整合させるために丁寧に調整が施されている。

土層の断面観察によると、石棺の掘り込みなど関連遺構はみられず近代の瓦などが混在しており、遺物は全く検出されなかった。したがって、この石棺は、そう古くない時期に別の場所で出土したものを移設したものと推定される。その場合出土地点については以下の可能性が考えられる。

- ・敷地内にある15号墳の南半分が住宅建設時（大正以前とのこと）に削平を受け、主体部の半分も消滅していることから、当時その一部を移設した。

- ・隣接する畑地に石棺が散在することから、付近から出土したものを移設した。

何れにせよ、周辺地域から出土したものと推定され、舟形石棺から組合せ式石棺への変遷を探るうえで貴重な資料を提供したものと見え、詳細については今後の類例の増加を待つこととしたい。

3. 吉野遺跡C地点

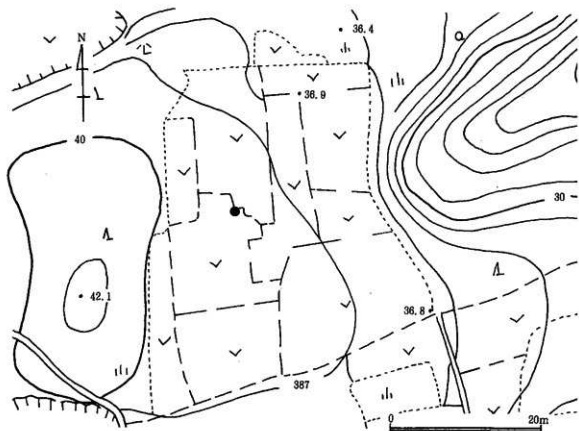
(1) 位置と環境

吉野遺跡C地点は、吉野町字吉野1532番地外に所在する。五ヶ瀬川北岸の標高約37mの平坦な台地上に立地し、周辺は昭和63年に吉野地区土地改良事業により基盤整備が終了している。

付近一帯は、いわゆる周知の埋蔵文化財包蔵地で、先土器時代～近世にかけての遺物が表採される地域である。調査地点から南東約150mには、文明十四年（1482）に延岡（県）地域を支配していた土持氏一族が建てたとされている卒塔婆がみられ、付近は「光福寺」といわれる寺院があったとの伝承が残っている。

(2) 調査に至る経緯

平成4年9月、市民から「吉野町の畑の一部が陥没し、その奥には空洞が続いている」



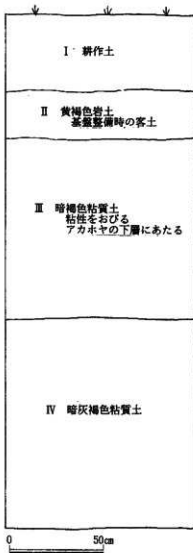
第9図 吉野遺跡C地点周辺地形図

との連絡を受けた。市教育委員会では早速地権者の高橋賢勇氏立ち会いの下、現地を視察した。現場は畑の真ん中で、直径約2mの範囲にわたり亀裂がみられ約20cmほど陥没していた。亀裂の間には空洞が奥深く続いているように観察された。高橋氏によると、周辺には基盤整備前に少なくとも3基の古墳らしきものが存在していたが、穴は掘ったことはないとのことであった。そこで、この空洞の原因を探ることと畑地復旧を目的として、平成4年10月15・16日に調査を実施した。

(3) 調査の概要

調査は、まず陥没した土の搬出から行った。約1mほど掘り下げたが表土とクロボクが混じった土と腐植していない竹笹がみられるばかりであったことから、陥没穴の壁面を精査したところ、エンボの爪跡らしきものが現れた。基盤整備の担当課であった市農林課に問い合わせたところ、設計では床掘りはなかったとのことであった。さらに調べたところ業者が竹類を処分するために掘った穴であることが判った。このため、調査を打ち切り現状復旧を行った。

今回の調査では何も成果を得ることはできなかった。但し、今後の教訓としていえることは、基盤整備に伴う発掘調査の有無については整備設計書だけの判断では問題があるということで、今後、工事中における現場立ち会い等の必要性が特に望まれよう。



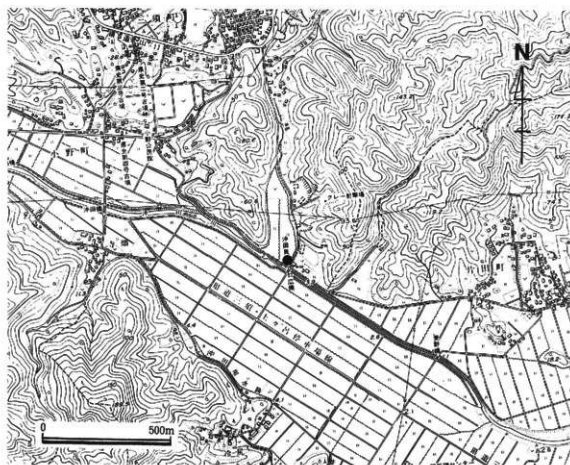
第10図 土層断面図

4. 横谷遺跡

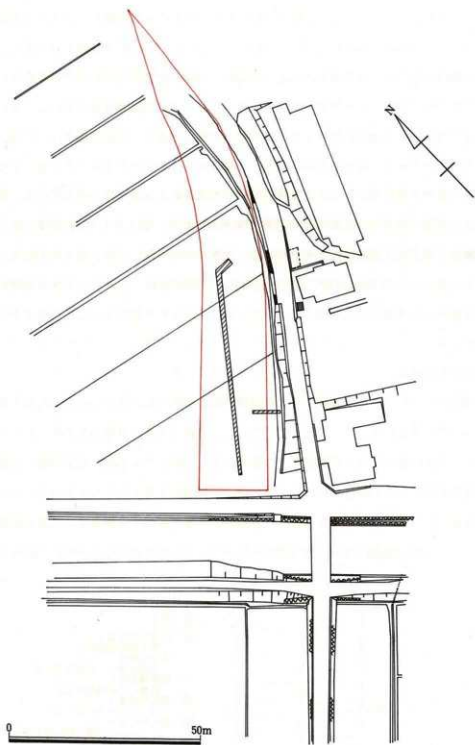
(1) 位置と環境

横谷遺跡は、延岡市小野町字横谷に所在する。三須町と小野町の間には、南方の沖田平野に向かって開析する通称横谷といわれる谷がある。遺跡は、その東側丘陵尾根の先端部にある標高約3～5mの地点に立地する。遺跡が所在する小野町周辺は延岡市の中南部に位置し、愛宕山の南側を東流する沖田川水系に属している。その沖田川は流域一帯が低湿地地帯で川の堆積作用が大きいことが知られ、殆ど毎年のように洪水が起きている。したがって、この付近の歴史を探るうえでは沖田川の堆積作用を念頭に入れながら進める必要がある。

沖田川は、門川町境の標高約300mの山々を源流とする全長約100kmの中河川で、下



第11図 横谷遺跡位置図

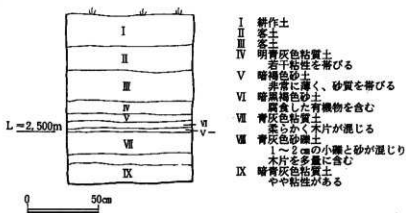


第12図 横谷遺跡調査区配置図 (赤線は工事予定区域)

流部で同水系の石田川と井替川が合流して日向灘に注いでいる。周辺のボーリング調査では、地表下約40～50mまで砂礫層、粘土層がV字谷の形に堆積していることが確認されており、洪積世以前はV字谷が存在していたことが伺える。沖積世にはいと、河口付近は基盤岩から成る山がみられ、海岸線には砂丘が発達していることから出口が塞がれた格好になり、内陸部は深い入り江状になり古沖田湾が存在していた。それを裏付けるように当遺跡に隣接する沖田貝塚（市指定史跡）、片田貝塚といった縄文時代の貝塚が点在し、縄文海進頃には入り江が存在していたことを示している。その後、沖田川の堆積作用により広大な沖積平野が形成されたものと推定されている。周辺には、前述の貝塚をはじめ多くの遺跡が知られている。東方約1.3kmの丘陵上の片田遺跡からは、先土器時代のナイフ形石器、スクレーパー類、石核、剥片類が出土している。また西方約700m付近には県指定延岡古墳群が点在し、さらに平野の南側対岸の丘陵上からは組合せ式石棺が検出され、隣接する伊形町越路からは手持勾玉が出土している。

(2) 調査に至る経緯

昭和63年6月10日、市土木課から「市道横谷線の道路改良に伴う沖田貝塚の取り扱いについて」照会を受けた。市教育委員会では、道路予定地に貝塚が含まれていたことから、現状保存の立場から路線変更の必要があり、隣接する水田に変更の場合は確認調査を実施する旨の回答を行った。その後、昭和63年8月から平成元年7月にかけて路線変更についての協議を行った。その結果、貝塚が露出する現市道ノリ面は現状保存とし、史跡の保護及び来訪者に便宜を図るためノリ面下端から2m残して路線を



第13図 土層断面図

通すこととなった。確認調査は、国庫補助による市道横谷線改良が決定されたことを受けて、平成4年10月19日～20日に実施した。

(3) 調査の概要

調査、予定地の南北方向にトレンチを入れ、土層断面を確認する方法を取り入れた。また、予定地付近は現在水田が営まれ、地形上水田跡の存在の可能性があることから、2カ所においてプラントオパール分析を実施した。

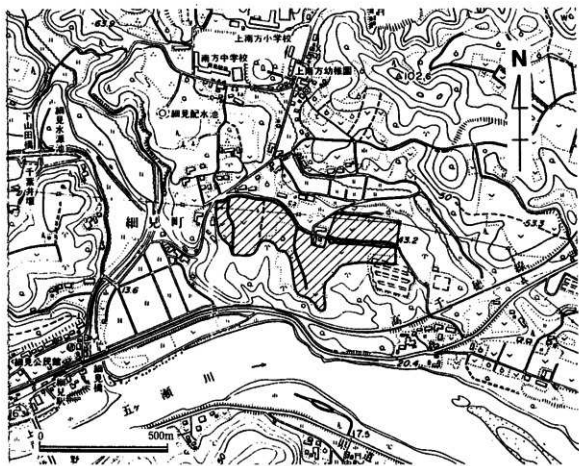
トレンチの土層断面によると、地表下約60cmまでは基盤整備に伴う客土が認められた。その下層は20cmほど、粘質土と砂層が互層をなしており、水路とみられる遺構の存在が確認された。その下層は約2mほど掘り下げたところで、古沖田湾の干潟を形成していたとみられる暗褐色粘土層が出現し、その上部付近からはサルボウ貝、カキなどの貝類が若干出土した。

今回の調査では、約2m下から貝類を検出した。これは、現在確認されている沖田貝塚からは約15mほど離れているものの、貝塚の規模がさらに広がっている可能性を示すものであり、今後の調査が注目されよう。

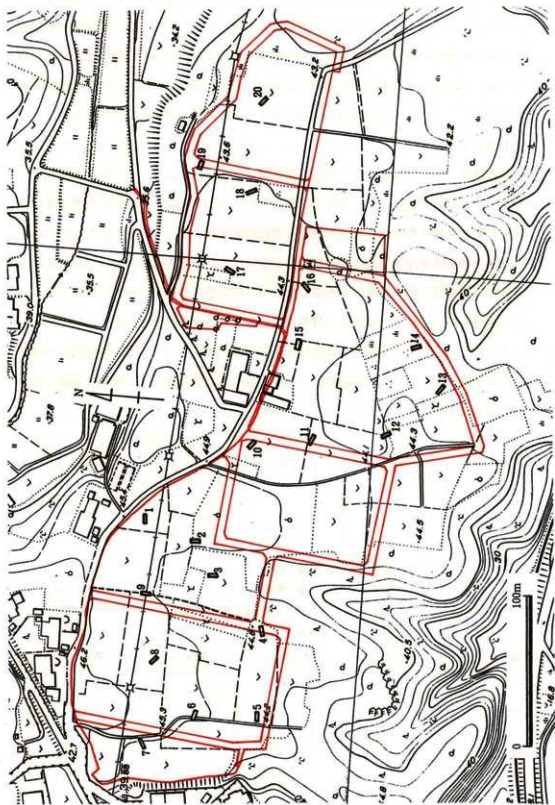
5. 黒土田遺跡

(1) 位置と環境

黒土田遺跡は延岡市細見町字黒土田に所在する。遺跡が所在する細見町は延岡市の西部に位置し、地区の中央部を五ヶ瀬川支流の細見川が蛇行しながら南流し、地区の南部で五ヶ瀬川に合流している。これらの河川により侵食された谷の上部には平坦で肥沃な台地が広がり多くの遺跡が知られている。本遺跡も五ヶ瀬川と細見川の合流点から北東部に広がるそうした立地環境にある標高約40～45mの台地上に立地する。遺跡から細見川を挟んで西側台地に対峙する中尾原遺跡からは、弥生後期後半から古墳時代後期にかけての集落跡が検出され鉄鍬、鉄製釣り針、鉄斧、磨製石包丁など多数の遺物が出土している。また細見川左岸の台地上に立地する畑山遺跡は先土器時代～



第14図 黒土田遺跡位置図

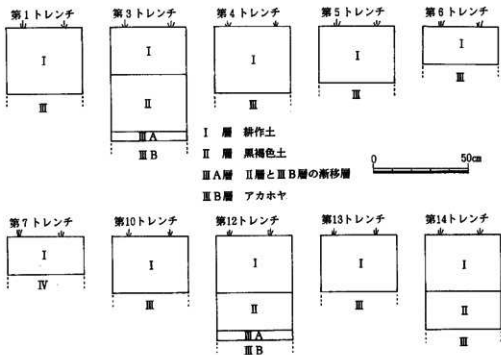


第15図 黒土田遺跡調査区配置図 (赤線は工事設計平面図)

中世にかけての複合遺跡であることが確認され、なかでも弥生時代の住居跡から鉄片が多数出土し鍛冶工房の可能性が指摘されている。更に、細見川の谷間に広がる微高地では山口遺跡の調査が実施され、古墳時代から近世にかけての遺構、遺物などが検出され、従来台地上に遺跡が所在するとみられていた同地区において低地遺跡の存在が確認されたことは、調査箇所を検討にあたり再考を促す結果となっている。

(2) 調査に至る経緯

細見地区では、昭和58年度に農業基盤整備事業が採択された。その後昭和60年度に黒土田地区（細見地区1号）が追加指定を受け、平成3年度に同地区の整備着手が決定された。平成3年10月、市農林課から市教育委員会に対して細見町字黒土田において農業基盤整備事業を実施したい旨の打診を受けた。教育委員会では、予定地一帯が「周知の埋蔵文化財包蔵地」であることから、耕地課と埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。その結果、基盤整備については現状の畑地面を基本として切土は行わないこととし、着手前に教育委員会の方で確認調査を行う。また発掘調査の対象となる道路部分については砂利敷きとして今後の発掘調査終了まで舗装は実施しないことで決着した。



第16図 土層断面図

確認調査については、平成4年11月4日～7日まで実施した。

(3) 調査の概要

調査は、対象面積が5.7haと大規模であることから、トレンチ調査法による確認方法を採用し、予定区の20箇所において調査を実施した。付近の基本層序は次のとおりである。Ⅰ層耕作土、Ⅱ層黒褐色土、Ⅲ層アカホヤ、Ⅳ層黒褐色粘質土、Ⅴ層暗褐色粘質土、Ⅵ層暗灰褐色粘質土、Ⅶ層A T（始良丹沢火山灰）、Ⅷ層暗褐色粘質土。

第1・2・3・8・9・10トレンチは、中央部の平坦部に位置し良好な堆積が予想されたが、第3・10トレンチを除いてⅠ層耕作土約35cm、下層はⅡ層が削平されⅢ層を検出した。遺物は、1層から土師器片、陶磁器片が出土した。第4・5・6・7トレンチは、台地の周辺にあたり土壌の流出が予想されたが、第7トレンチでⅠ層の下層にⅣ層が検出された以外はほぼ良好な堆積状態であった。第11・12・13・14トレンチ周辺は、昔古墳らしい塚が数カ所あったらしく、調査においても須恵器片が出土した。15・16トレンチは、Ⅰ層の下層にⅣ層が確認され相当の削平を受けていることが分かった。また、15トレンチからは集石遺構1基を検出した。第17・18・19・20トレンチは台地の北側周辺部にあたるが、Ⅰ層の下層がⅡ層若しくはⅢ層で概ね良好な堆積状況であることが確認された。

今回の調査では、予定地のほぼ全域にわたり良好な堆積状況であることが確認され、今後進められる発掘調査が期待されよう。

6. 延岡城内遺跡B・D地点

(1) 位置と環境

延岡城は、慶長八年（1603）初代延岡藩主高橋元種氏により築城され、その後、有馬氏、三浦氏、牧野氏と城主がかわり、延享四年（1747）に内藤氏が入封後は明治四年（1871）の廃藩置県まで続いている。絵図史料からみた城郭内における建物等の配置については、天主台とされる最高位の曲輪には何もみられず、一段下がった本丸と同レベルにある帯曲輪状の東側先端部に三階櫓が見受けられる。本丸の出口には二階櫓門、本丸と二ノ丸の間にある空間の西側隅には二階櫓が認められる。文献史料によると、三階櫓は明暦二年（1683）二月に焼失したとされ、その後再建されたという記録は確認されていない。



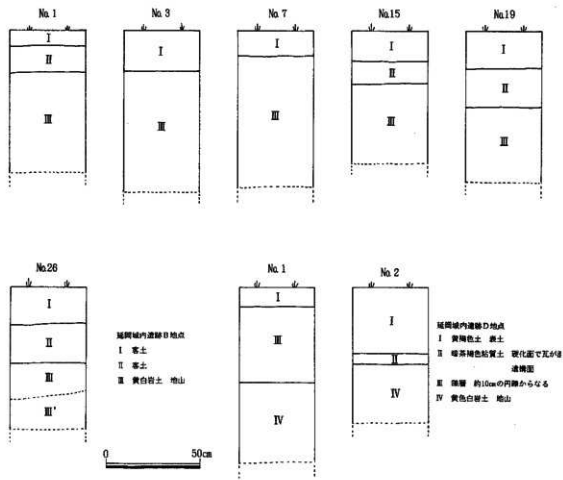
第17図 延岡城内遺跡B・D地点位置図

B地点付近は、二階櫓があったとされる地点のすぐ西側の1段下がった地点にあたり、地表には多量の瓦類が散乱している。平成4年春には、付近から内藤家の家紋である「下り藤」が刻まれた鬼瓦片が採集されている。史料によると東側部分に空堀がみられ、昨年度の調査で幅約3m、深さ約2mの空堀跡を検出している。

D地点は、二ノ丸の東隅にあたり、北大手門（北口門）から階段を登った地点で、真横には千人殺し石垣がみられることから城郭内でも重要なポイントとみられる。

(2) 調査に至る経緯

城山公園は都市公園法に規定される都市公園として指定を受けている。昭和62年になると、建設省都市景観形成モデル事業の認可を受け、平成元年度から本格的な整備



第20図 土層断面図

を行っている。整備予定区域は、文化財保護法で規程される「周知の埋蔵文化財包蔵地」であるが、担当部局である市都市計画課との連絡関係が不十分であったために、教育委員会として十分な対応がなされてなかった。このため、平成3年度後半からは事前の発掘調査並びに整備内容について協議を実施するに至った。平成4年度の整備については、北大手門（北口門）復元及び排水溝整備、遊具広場の防護柵整備が主な事業である。今回は、排水溝及び防護柵予定地について今後の参考資料とするため土層断面観察による調査を実施した。調査は工事立ち会いの形式で平成5年2～3月にかけて実施した。なお、北大手門については平成4年7月8日～10月5日に発掘調査を実施し、検出された遺構を可能な限り保存しながら整備が進められている。

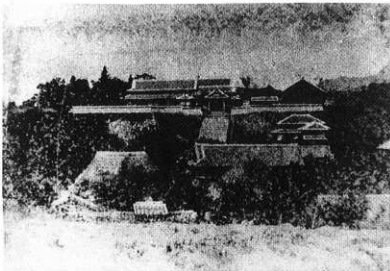
(3) 調査の概要

B地点は防護柵設置の基礎部分について調査を実施した。調査箇所は37カ所である。いずれも、地表から約20～40cmまで客土が見受けられ、その下層は地山の黄白色岩土が検出され遺物等は検出されなかった。

D地点は、二ノ丸にある「千人殺し石垣」の基礎部分にあたり、No1については石垣の続きが検出される可能性があった。調査の結果、表土を約10cm剥いだところで直径約10cm深さ40cmにわたり栗石群が検出され、その下層は地山とみられる粘質を帯びた岩土が40cm以上続いていた。No2は北大手門を入れて階段を登りきった地点の右側にあたり、側には電話ボックスが設置されている。二ノ丸一帯は、戦後から昭和50年代にかけて動物園が開園され、動物小屋や猿が島など多くの構築物が造られていたことから、相当の攪乱が予想された。しかし、断面観察によると、地表から約35cm下げたところまで客土が見受けられ、その直下から硬化面が確認され瓦が出土した。

今回の調査では、延岡城のシンボルである高さ約22mを測る「千人殺し石垣」基礎の構造の一部について、石垣の規模とは相反するように予想外に簡易な方法で石垣が築かれていたことが判明し、延岡城の石垣の構造を知るうえで貴重な資料を提供したといえよう。また、二ノ丸については、猿が島建設時に排出された土とみられる客土によって周辺に遺構が保存されている可能性を示す結果となり、今後の調査に対して参考資料を提供したといえよう。

延岡城内遺跡C地点



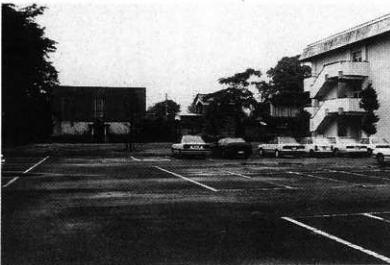
西ノ丸（現在内藤記念館）の内藤御殿（大正時代）

現在プールがある場所に建物がみられる。



調査予定地付近

延岡小学校が建っていた昭和36年に撮影されたもの。左下は、内藤記念館が建つところ（空地）。



調査予定地付近

北から望む

延岡城内遺跡C地点

表土剥ぎ取り風景
第1トレンチ



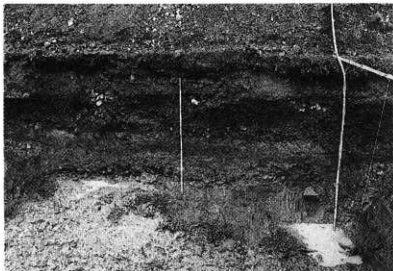
調査風景
第1トレンチの掘跡部分



石垣検出状況
第1トレンチ南側
延岡小学校のトイレ施設
で破壊されていた。



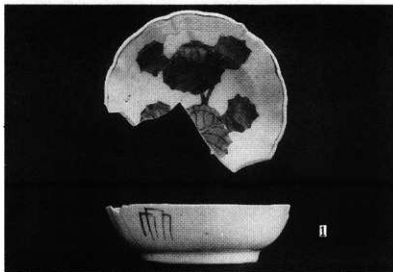
延岡城内C地点



土層断面
第1トレンチ
中央の黒い部分は石炭
ガラ



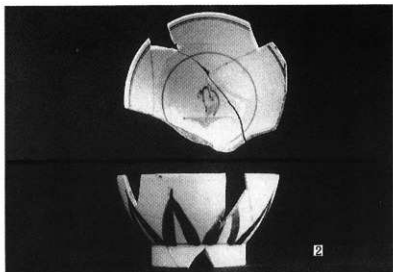
遺物出土状況
九瓦



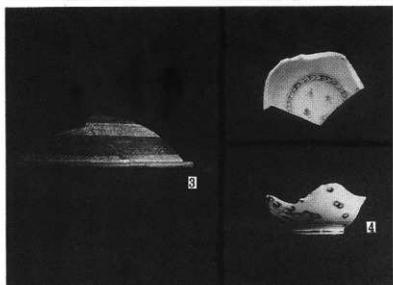
出土遺物

延岡城内遺跡C地点

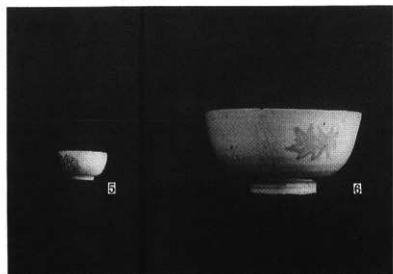
出土遺物



出土遺物



出土遺物



吉野遺跡B地点



調査地点
遠景
北から望む



調査前風景
石棺は現況をとどめない形で置かれていた。



調査風景
石棺を除去後、ノリ面の調査

石棺(墓)
外面
縄掛け突起
が見られる。



石棺(墓)
内面
調整痕が
見受けら
れる。



吉野遺跡C地点



調査地点遠景
南西から望む



調査地点近景
ほぼ円形に陥没している



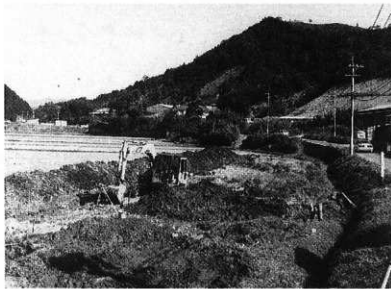
土層断面
黄白色粘質岩土と黒褐色土が互層となっている

横谷遺跡

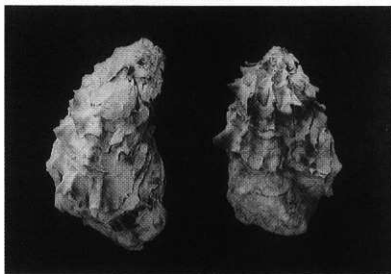
調査地点遠景
南西上空から望む

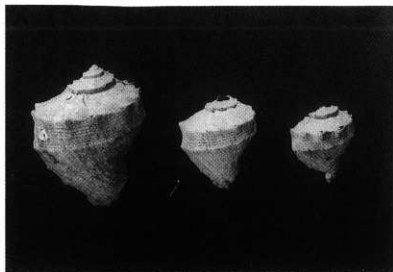


トレンチ掘り風景
南から望む



出土遺物
カキ





出土遺物
ハイガイ



出土遺物
ザルボウ貝



出土遺物
マツカサ

黒土田遺跡

調査地点遠景
東から望む



第1トレンチ
上層を検出



第2トレンチ



黒土田遺跡



第3トレンチ

I層 耕作土
II層 黒褐色土
III層 アカホヤ



第4トレンチ

柱穴を検出



第12トレンチ

延岡城内遺跡 B・D地点

B地点近景
南から望む



B地点東隅から
検出された空堀跡
幅約3m 深さ約2m



D地点No 2土層断面
中央やや上部に
硬化面がみられる



平成4年度 市内遺跡発掘調査事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993年3月

発 行 延岡市教育委員会
延岡市東本小路2-1

印 刷 ながと印刷